

山梨県身延町中富地区過疎地寺院調査

山寺から集落の崩壊をみる——とくに富士見山東麓山地を中心に——

(日蓮宗現代宗教研究所顧問)

久住 謙 是

目 次

はじめに

1、中富地区の地形と歴史

2、中富の三地域、

A、富士見山東麓山地 B、中間山地 C、富士川河岸の日蓮宗寺院

3、A地域富士見山東麓山地の過疎地寺院訪問

4、A地域の寺院衰退から集落の崩壊をみる。

(イ) 住職は地類の坊さんでなければ

(ロ) 近代化が集落を崩壊させた

むすび

参考文献

はじめに

日蓮宗宗門人である私は、日蓮宗過疎地寺院対策懇談会が、旧中富町の過疎化の現状を調査した折、そのメンバーの一人として参加した。センター方式という提案が、盛られた報告書が作成され、所管の機関へ出されたが、世間には、現状を知らしめることがなかった。

私は、隣りの早川町過疎地寺院調査を、すでに、「現代宗教研究」に発表していたので、いつの機会にか、調査発表したいと念願していた。

このたび、二二年ぶりに早川町再調査する現宗研メンバーに入れて頂いたことが、旧中富町調査をスケッチしておきたい思いを強くしたのである。

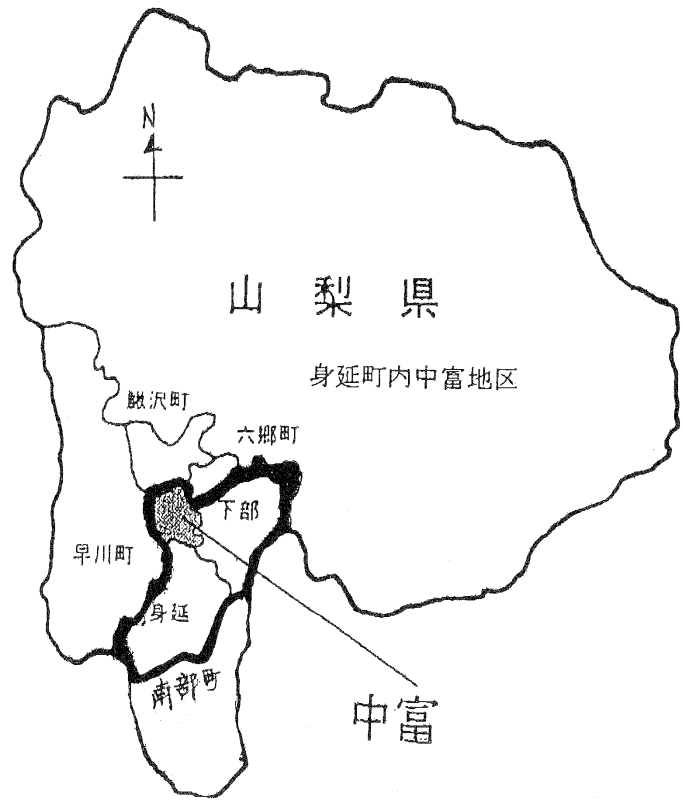
過疎地調査で旧交の身延町切石、善妙寺住職秋山智経上人、同町小田、善行寺住職山本是光上人、早川町高住、常蔵寺住職服部智穂上人のご案内とご教示を再度頂くことができました。改めて各上人に御礼申し上げます。

1、中富地区の地形と歴史

身延町中富地区は、平成一六年九月一二日、旧中富町が、下部町、南部町と共に合併して身延町となった。(図表¹⁾)

合併後、平成一七年一月一日の身延町の人口は、一万六千八八〇人で、そのの中の中富地区の人口は、四千二百九人である。

(図表 1)



中富地区の人口推移は、昭和三九年、九千六百六
七人、平成元年、五千四百八〇人であった。

山梨県内の狭南地方とよばれる旧町村名でいうと
ころの富沢町、南部町、身延町、中富町、早川町
は、過疎指定地域で、過疎化が進んだ町村に数えら
れている。(過疎白書)

高度経済成長の都市へ人口が集中し、人口の社会
減少が顕著で、その現象は現在も続いている。

若者中心に、労働人口を引き留める条件が整って
いないが故に過疎化が進んでいるといえよう。

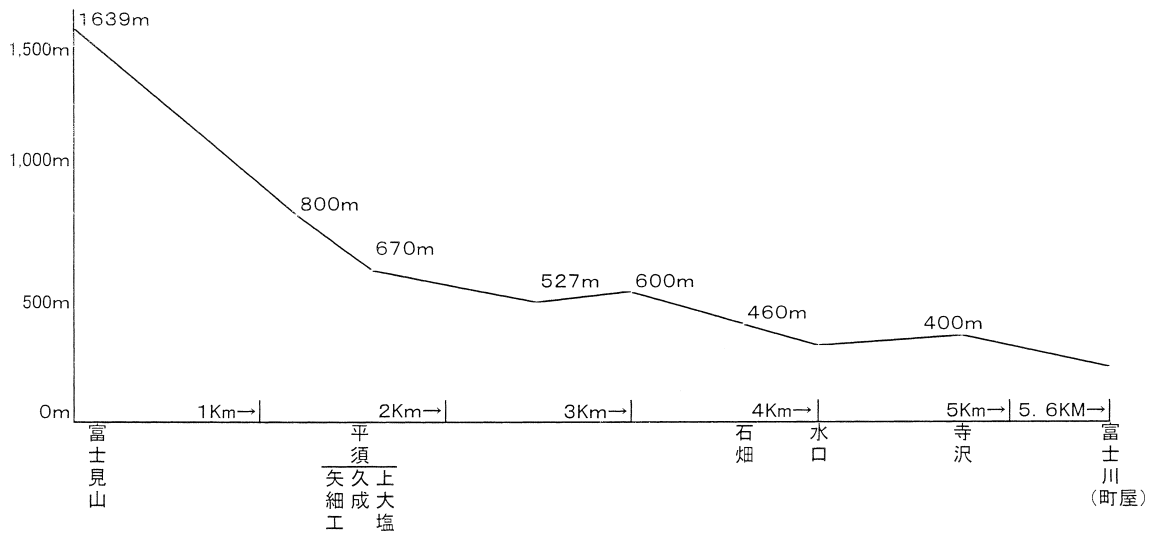
それは狭南地方の実状であり、中富地区、とくに
調査対象の地域にいえることで、この視点から言及

してゆくこととする。

中富地区は、西部にある富士見山（一六三九・五メートル）が、シンボルの山で、そこから扇状に東へ傾斜面をつ
くって富士川に接している。南の麓には早川があり西から東へ流れ、富士川に注いでいる。

面積は四三・三七平方キロで、その六〇・四パーセントが山林であり、地形的には、富士見山東麓の地域斜面が中心で、手打沢川、寺沢川、夜子沢
川の急傾斜面が、全面積の八〇パーセントにも及ぶ、富士見山東麓の地域斜面が中心で、手打沢川、寺沢川、夜子沢
川、曙川など、一級河川三一を数え、大雨が降ると、洪水を起こす暴れ川でもある。平坦な富士川沿い、国道五二号
線に沿った地域を除いて、富士見山を水源とする急流で不安定な河川に沿った緩傾斜地や山間盆地が、中富地区の集

中富地区富士見山・富士川(町屋)横断図(国土地理院1:25,000) (図表2)



落を点在させているところなのである。

集落の歴史は、山村の平須に縄文中期の遺跡があり、山間の集落生成の古さが偲ばれる。八日市場の真言宗の大聖寺の縁起に認められる甲斐源氏の歴史から、江戸時代に富士川沿い河岸の賑わいや往還筋の宿場として、河岸地域が発展してきた。

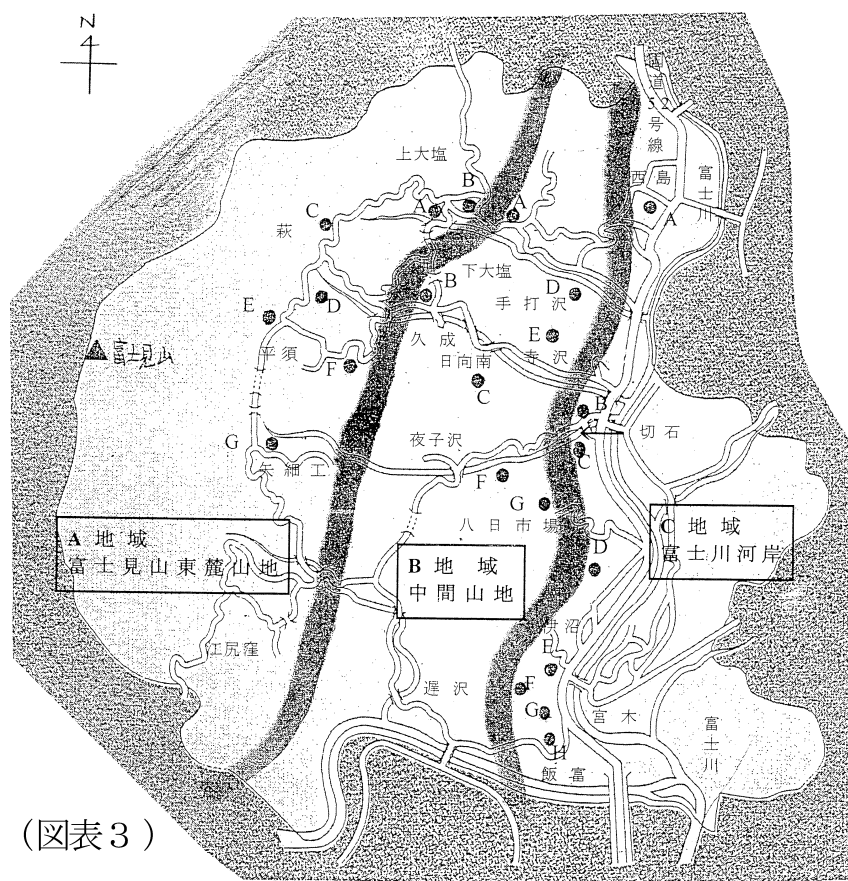
明治二九年(一八九六)西島村、大須成村、静川村、曙村が合併して中富町ができた。平成一七年には、前記の通り、身延町に併合して、中富町名は、無くなったのである。

今回、調査対象地域として選定した集落の矢細工は前記曙村に属し、平須、久成、大塩は大須成村に属している。

中富地区で、最も富士見山に近い高地の集落で、過疎化が著しく進んでいる山付の集落である。(図表2)

2、中富の三地域

中富地区を三地域に分ける理由は、前述の通り、富士見山を頂上として、東麓に傾斜する地域の内、最も海拔が高く、平均六〇〇メートルで富士見山に近い山付のところに開けた集落を、A、富士見山東麓山地と名づける。



(図表3)

には日蓮宗寺院はなく偏在している。

中富地区二三カ寺の檀家数の増減を、日本の戦後高度経済成長が緒についた昭和三〇年と、五〇年後の平成一七年を比較したものである。(図表4)

C地域、飯富日寺以外、檀家の増加はない。

すべて減少の寺院で、過疎地を象徴しているといえる。

次に、B、中間山地は、Aの下位置、富士川に至る間の所を指す。海拔三〇〇メートルの傾斜地を指す。最後の、C、富士川河岸地域を指す。富士川に沿った国道五二号線が走る平地(切石のところで海拔二三六メートル)に分類する。(図表3)

中富地区の寺院数は、中富町誌に依れば、四八カ寺あり、その内一三カ寺が廃寺となり、現在三三カ寺を数え、その内訳は、日蓮宗二三カ寺、その外、曹洞宗九、臨済宗と真言宗が各一である。

総本山身延山久遠寺が近くにあり、日蓮宗寺院が多い。古くは真言宗から日蓮宗に転宗したと伝える。

日蓮宗寺院は、A地域の平須、久成、大塩に、B地域の夜子沢、寺沢、手打沢に、C地域の切石、伊沼、飯富などにあり、A地域の江尻窪、B地域の遅沢など

身延町中富地区の日蓮宗寺院（図表4）

No.	寺院記号	檀家数の増減			住職の	常住(○) 無住(×)
		a 昭和30年 (1995)	b平成17年 (2005)	b/a	a 昭和30年 (1995)	b平成17年 (2005)
1	上大塩 A-A	110	72	65	○	○
2	上大塩 A-B	12	7	58	○	×
3	大塩萩 A-C	11	5	45	○	×
4	久成堂平 A-D	12	5	42	○	×
5	平須 A-E	20	8	40	○	×
6	平須 A-F	40	15	38	○	×
7	矢細工 A-G	45	20	44	○	×
8	下大塩 B-A	35	22	63	○	×
9	久成 B-B	31	25	81	○	×
10	日向南石畑 B-C	42	29	70	○	×
11	手打沢 B-D	80	65	81	○	○
12	寺沢 B-E	45	44	98	○	×
13	夜子沢 B-F	85	58	68	○	○
14	八日市場 大子山 B-G	47	16	34	○	×
15	西島 C-A	60	45	75	○	×
16	切石 C-B	55	38	69	○	○
17	切石 C-C	130	110	85	○	○
18	八日市場 C-D	39	33	85	○	○
19	伊沼 C-E	11	10	91	○	○
20	飯富 山本 C-F	0	0	0	×	×
21	飯富 C-G	240	170	71	○	○
22	飯富 C-H	83	85	102	○	○

中富地区地域別日蓮宗寺院（図表5）

地域別	寺院数	a 昭和30年		b 平成17年		b/a	住職	
		檀家総数	平均	檀家総数	平均	檀家減少率	常住数	常住率
A地域：富士見山東麓山地	7	250	36	132	19	53	1	14
B地域：中間山地	7	365	52	259	37	71	2	29
C地域：富士川河岸	8	618	77	491	61	79	6	75
計	22	1233	55	882	39	68	9	39

同じく、住職の常住・無住について、昭和三〇年には、特殊な一カ寺を除いては、全寺院が住職常住であった。五〇年後の平成一七年には、九カ寺の常住寺院。一三カ寺が無住寺院となっている。過疎化の進行が、如実に数値にあらわれている。

地域別にみた二つの年代の檀家総数と、その減少傾向（図表5）がわかる。

檀家総数では、C地域六一八軒、B地域三六五軒、A地域二五〇軒の順であり、檀家の減少傾向は、A地域一三三軒、残存率五三パーセント、B地域二五九軒、残存率七一パーセント、C地域四九一軒、残存率七九パーセントとなっている。

一カ寺当りの檀家数が、A地域一九軒、B地域三七軒、C地域六一軒である。

中富地区の、この傾向は、過疎化減少の数値である。とくに、A地域の檀家残存五三パーセントで、一カ寺当り平均一九軒の檀家を持っている。

この数値をみる限り、住職の常住は不可能である。事実、七カ寺中、一カ寺の常住寺院であり、他の六カ寺無住職寺である。

中富地区を三地域に分類し、過疎化が顕著なA地域、富士見山東麓山地の各寺を、再び尋ねた。年々に居住戸数が減ってきており、空屋の戸閉め家屋が増え、廃村のイメージを一層強くした。

中富地区日蓮宗寺院

A地域、富士見山東麓山地 七カ寺の現状

上大塩A寺

元真言宗の寺、A地域唯一の住職常住、当年八十六才、老夫婦で寺を護持、昭和三十年には檀家一一〇軒あったが、現在は七五軒。檀家の布施で寺を維持、生活できている。

しかし、後継者なし、いづれ、無住寺となり、代務者の世話になる。

かつては、檀家各戸に四〜七人の子どもが居た。A地域の久成・大塩・平須の集落には六〇〇人の小学生がおり、山間地で独立した集落が形成され、婚姻を結ぶなど、共同体として確立していた。現在は小学生は一人も居ない。

山間地の畑作は、うどん、ほうとうなど、「のしれ」といわれる常食の小麦栽培が中心で、現金収入は養蚕と炭・薪、出稼ぎ職人によるものであった。

昭和四〇年代、子ども教育のため、長男も集落を出るようになり、老人世帯となっていた。親が居ても、正月・盆に里帰りする人が少なくなっている。寺や先祖を敬う心も薄くなってきた。

上大塩B寺

上大塩B寺は、大塩荻C寺が山村の高い所にあり、上大塩の集落へは、日光のいろは坂を想起する急坂を二百メー

トル程下った所にある。山付では大きな集落である。

この集落にA寺と隣接してB寺がある。

昭和三〇年には一二軒の檀家があった。現在は七軒である。昭和三〇年代は、住職が常住したが、A寺の常住住職以外、山付のA地域の寺院は、皆無住である。

B寺は、少ない檀家数ながら、立派な本堂と観音堂がある。集落を見渡すことができる高台にあって、熟した柿の赤色や、黄色い柚の実りを訪れた季節柄見ることができた。

A寺が住職常住で隣りにあり、集落も同一であるが、合併の話は起こらない。先祖代々の菩提寺、わが寺の意識は強く、護持会費を拠出し合い寺を維持している。しかし、少数の老人世帯で、寺を守っていこうという信念と裏腹に、将来のB寺については、きびしいものがある。

大塩荻C寺

大塩荻C寺は、久成堂平D寺を山付の道路で西へ進めた大字大塩の西端の海拔の最も高い道路沿いにある。

一見して最近建てられた集会場といった印象である。屋根替え中に、茅に火が着いて本堂を全焼、昭和五六年に、少ない檀家が力を合わせて再建したのが、現在の本堂である。

昭和三十年には檀家一一軒、現在は五軒である。毎月十三日の夜、代務住職がお題目会を開き、全戸が熱心に参集している。

代務手続料や年間の宗費納金、檀家の重荷になっていて、何とかならないかという。

山付の農家は、空家が目立ち、畑も周囲を電気柵を索線した害獣除けをした耕地のほかは、放置された雑草地が多

い。猪や野猿、鹿の畑荒らしが、畑の耕作意欲を萎させている。時には、野猿の群れが来ると爆竹を鳴らして追い払うことが日常化している。本来、奥山に棲息していた動物が、里山を越え、農地や集落に出没する常態となった。おだやかな山村を苦しめる一因となっている。

久成堂平D寺

山付の道路を、平須E寺より西へ進むと、D寺がある。西に富士見山を背後とし、東に緩やかに傾斜した台地が広々とひろがり、遠くに富士山の山頂が遠望できるおだやかな桃源境といった景色の中にD寺が建っている。

しかし、人の気配は無く、D寺の隣りの畑は、害獣除けの電気柵で囲われ、周辺に点在する家は空家のようにである。

昭和三〇年には檀家一二軒、現在は五軒である。住職不在が続いている。

この集落の一七戸の先祖が創建した時で、地類とよばれる集落民の強い結びつきで、一族の寺として守ってきた。山付の寺同士の合併の話もあるが、一緒になる思いは全くない。

葬儀・法事も、余所者の見知らぬ坊さんではだめで、この土地生れの人にかぎる。宗旨よりも、血縁よりも、大家、新家とよばれる地類の結び付きの中で、寺が護持されている。

平須E寺

平須集落の中にF寺と二カ寺ある一つ、F寺より、さらに山付の寺で、四〇年以上、住職不在が続いている。昭和三〇年に二〇軒の檀家、現在は八軒である。

境内には、大公孫樹が、おりから黄金色に輝いていた。無住職寺とはいえ、本堂と庫裡が整っている。少ない檀家ながら、集落を離れた檀家の協力を得ながら護持してきているという。同じ集落の中の、災害で潰れた本堂の無いF寺と合併の話があるが、気風が違うから否という意見が多いので難しいという。

昔は、米麦中心の農業で、現金収入は養蚕であった。今は仕事がない。雪が降ると国道へ出られないので、通勤しなくとも、集落には住めない。この集落は年金で暮らす七〇才以上の三七人が住んでいる。一〇年前から、「カラオケ放談会」を毎月一回、公民館で開き住民全員の憩いの集会となっている。五年先には、集落は壊滅するのではないかと、みんなが心配している。

平須F寺

真言宗から改宗した寺で、七間半四面の本堂、宝蔵、鐘樓堂、庫裡などの諸堂を有した山付の有力寺院で、江戸時代（一六三六年）の大改修板曼荼羅奉加記録に六〇〇余名の氏名が記されている。明治一五年（一八八二）には九二軒の檀家があった。昭和三〇年（一九五五）には四〇軒とあり、現在は一五軒である。伊勢湾台風（一九五九）の時、土砂で倒壊した俣の本堂が放置され、日朝堂と庫裡が空家として残っている。

周辺は、段々畑と思われる土地に杉が植林され、所々の湿地には、みみずを漁る猪の足跡が残され、荒廃した寺域となっている。

このF寺まで来る道は、畑の畔で、閉鎖された淋しい寺といった印象である。

ほとんど空家となっている集落の狭い道を下って、F寺にたどり着いた。一五軒の檀家は、自分達の葬儀のことが心配で、寺の護持など考えも及ばないこととしている。

矢細工G寺

富士川の切石から夜子沢川沿いに登り、中山、出合、腰巻の集落を越えて、海拔八〇〇メートルの緩傾斜の盆地が矢細工の集落である。背後に富士見山があり、まさしく、山つきの盆地、高地の集落であり、東側の開かれた景観は、富士川を越えた毛無山・雨ヶ岳が望見できる。旧曙村の中で一カ寺の日蓮宗寺院である。

この集落には禅宗寺院があったが廃寺となっている。

昭和二〇年代には七三軒の世帯があり、G寺の檀家は四五軒であった。現在は三〇軒が住み、檀家は三〇軒である。その内一六軒が一人住まいの世帯で、勤め人一人を除いて、年金生活者である。

前住職が代務寺として寺を護持し、高令者の檀家の教化に当たっている。代務寺制度の期間延長と宗費課金の負担軽減を希望し、宗門が過疎地寺院への対応、善処を求めている。

4、A地域の寺院衰退から集落の崩壊をみる。

(イ) 住職は地類の坊さんでなければ

過疎地寺院調査中、「住職は地類の坊さんでなければだめだ」「余所者の坊さんが来てもだめだ」という言葉を、寺ごとに、檀家の意見として聞かされた。

一族から出家した者、長い間、集落内に住んでいた坊さんでないと、受け入れないという。

過疎地寺院が、無住化してゆく中、居住する檀家に教化活動を外部から支援する、派遣僧侶の提案に対する返答であった。

困っている過疎地の檀家に対して、法要や法話を通して、信仰の指導を進め、過疎地無住寺の解消、若い僧侶の活動の場として考えられたのであった。

前述の調査報告の如く、A地域も全寺院住職常住であったが、一カ寺を除いて、すべて住職不在となる状況が、深刻な過疎を物語っている。調査対象の山付地域の歴史的人口構成を、歴史書によってみると、矢細工は、七〇軒、三〇四人（天保五年、一八三四）、平須は七八軒、三四九人（安政三年一八五六）、久成は、九一軒、四五一人（明治二年一八六九）、大塩は、一四二軒、六七〇人とある。

平須の長遠寺の大曼荼羅大改修（一六三六年）には、六〇〇余名の奉加記録があり、山付の集落が、いかに多くの

人口を擁した生活集団であつたかが想像される。

八十歳の老人の話では、山付の大須成小学校に六〇〇人の児童が、平須、久成、大塩の各地から通学していたものだ、という。

山付集落は、前述の通り、農家一戸当りの面積は狭く、貧農の呼称である五反百姓、その広さにも及ばない畑に、主食である麦を作り、傾斜地を利用した原始的な焼畑には粟、蕎麦、稗、大小豆、馬鈴薯などを作つて糊口をしのぐ、自給自足の農業が営まれてきた。

換金できる養蚕、炭、薪の販売に従事する者、さらに、大塩の記録によれば、大工、茅大工、石工、木挽など、非農業従事者の出稼ぎ人など、さまざまな生業を持つ職人が多かった。久成の或る時ときには、農業より非農業者が多かったことが記されている。

出稼ぎ人の収入が家族を養い、集落が維持されていたのである。

狭い耕地、焼畑農業に依存し、長い間、ほとんど外界との交通も閉ざされてきた。これは、富士見山西山麓、早川町河岸段丘に発達した奈良田や湯島・新倉などの集落にも共通して言える。

大塩の老人は、かつて、「死ぬまでにせめて一度、甲府というところに行つて見たい」と言いながら死んでいった。という話が伝わっている。

隣り町の早川町雨畑では、臨終の間際に、竹筒に入れた米の音を聞かせ、「米の音がする」と言つて喜ばせたという。麦作中心で、米は貴重であつた。婚姻関係も、集落内か、山付の集落同士が多く、生産、生活が共通した集落、山付の地域の中で、長い間行われてきた。

このA地域、大塩、久成、平須、矢細工の山付道路は、古長谷、福原、梨子を通り、早川町の笹走、塩の上に繋がりが交流が行われていた。早川町の山付地域も同様の過疎化であり、富士見山の西麓の集落大原野も同様である。

「生みの親」のほか、産婆の役をつとめた「取上親」そして、「名付親」、子供が何人生れても育たない時、次に生まれる子供がよく育つようにと、いったん捨てて拾ってもらう「拾い親」など、沢山の親・子が結ばれ、親の家族、子の家族の関係が緊密になることによって、焼畑農業をはじめ、家同士の共働の場が、オーヤ（本家）、シンヤ（分家）に限らず、集落の共同体を結束させてきたのである。

そうした集落共同体の宗教を通じて、結束を強めてきたのが、題目講と、寺の諸行事であった。

寺の行事を司さざる住職は、山付集落の特殊な家、家族関係を承知した上で、リーダー的役割を担う信頼された僧侶でなければならない。「地類の坊さん」とは、集落内で同族意識を持つことができる僧侶のことであり、派遣された余所者の僧侶は、受け入れ難い伝統があったということである。

(ロ) 近代化が、集落を崩壊させた。

山付集落の四カ所は、幕末から太平洋戦争終戦まで、各々三〇〇名から七〇〇名の人口を数えてきた。前記の通りである。

現在、各集落とも、数十名単位、極めて近い将来、年金生活の高令者達が、欠けてゆくに従い、確実に集落が廃れる日が訪れるであろうことが予想される。

繰り返して言うところの、都市中心の経済至上主義、高度経済成長を遂げてきた日本は、数百年続いてきた山付の集落を、壊滅させつつあるのである。

都市と農村の所得格差が広がり、とくに劣悪な山村農業は、経済的に成立せず、農業従事者は、畑を放棄して、都市へ就職せざるをえなかったこと。伝統の出稼ぎ職人は、家族ぐるみ集落を離れ、都市へ定住したこと。

地域開発により、自動車道路が山付集落に通じたことにより、若者を一層集落から離散させる結果となった。通勤

圈内には、職場が無い状況であったこと。

進学年令になった子供を通学させることが難しい地域のため、教育環境を求めて都市へ移住したこと。

マスコミの発達、テレビの影響など、都市的意識、都市的生活の意識が高まったこと。

伝統的な集落共同体、つき合いの煩わしさへ、若者の自由でありたい反発があること。

情報活動の発達から、若い人達中心に価値観の激変がみられること。

猪や鹿、野猿の被害が、年毎にはげしくなり、電気索棚や爆竹使用など、住み難いふるさと観を作り出していること。

寺で行われてきた題目講、先祖供養などが老人中心となり、集落を離れた家族への信仰継承が難しくなっていること。

盆、正月の帰郷、寺詣り、墓参りも、年々少なくなり、親が亡くなると、帰る機会がさらに少なくなっていること。

都会で生れた子供達は、先祖の故郷へ帰る意識が薄くなってきていること。

親の葬儀式は、寺ではなく、町内の国道沿いにある葬斎場で行うケースが多くなったこと。

都会で亡くなった親は、お骨を墓地へ埋葬するために戻ってくるだけというケースや、先祖のお墓を、都会の霊園へ移すという家族も現われてきていること。などなど。

日本が、かつてない平和の持続と、経済成長、物の豊かさが、近代化という名のもとに、長い間に築かれてきた山村の共同体、集落と共に、心の依拠、寺院も衰退の途をたどることとなったのである。

むすび

- 一、数百年続いてきた山村集落が、経済至上、都市文明発展の影で壊滅しつつある。
 - 二、故郷離散者の、Uターンは、はかない夢、幻影でしかなかった。
 - 三、山村の里山が、自然と動物、人間・集落との住み分け、共存を保証してきた。しかし、今、人間のエゴによって失われつつある。
 - 四、山村の過疎は、貧困、閉鎖社会、因習からの解放、そして、教育環境、文化の享受、職業の選択、情報社会、消費生活を自由化させた。時代・社会の必然の波であつたろうか。
 - 五、宗教的過疎と、あえて言えば、檀家流出による信仰集団の機能停止、拠点（寺院）の維持困難、日常の信仰指導者の不在（住職不在）が、残された高齢者檀家の心の依拠、連帯を補う「地類の僧侶」の役割は、宗教者として重要である。評価と支援が必要である。
 - 六、過疎問題は、現代社会において不可避であり、不可抗力である。時限立法による数次の国の施策が、数十年続けられてきた。対策とは何であつたのか。現状がその答えである。
 - 七、過疎は、山村に限られていない。大都市の都心にも、商店街にも団地にも、平成のファーストフード的現象が、拡散広域化している。
 - 山村のスローフード的人間回帰が、一層見直される時が来ることを確信したいと思う。
 - 八、過疎問題は、過密問題と表裏して、人間本来、自然人であることを喪失させない課題である。
- 以上、身延町中富地区の山村集落の調査報告とさせて頂きます。

平成 17 年 国 勢 調 査 速 報

南巨摩郡人口の推移(昭和35年～平成17年)

年度 町名	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成 2年	平成 7年	平成12年	平成17年
増穂町	13,996	13,677	13,481	13,071	13,199	13,373	13,142	13,019	13,070	13,110
鍛沢町	7,572	6,913	6,383	6,163	5,616	5,283	5,028	4,610	4,474	4,294
早川町	10,679	6,565	4,862	3,777	3,005	2,651	2,269	1,977	1,740	1,534
身延町	35,616	31,294	27,697	25,083	23,222	22,327	20,849	19,570	18,021	16,333
下部	12,028	10,758	9,329	8,456	7,719	7,416	6,638	6,205	5,530	4,915
中富	9,783	8,286	7,112	6,282	5,696	5,503	5,205	4,904	4,477	4,034
身延	13,805	12,250	11,256	10,345	9,807	9,408	9,006	8,461	8,014	7,384
南部町	16,124	14,879	13,576	12,771	12,465	11,959	11,826	11,437	10,863	10,254
南部	9,286	8,674	7,937	7,590	7,445	7,172	7,128	7,064	6,711	6,265
富沢	6,838	6,205	5,639	5,181	5,020	4,787	4,698	4,373	4,152	3,989
計	83,977	73,328	65,999	60,865	57,507	55,593	53,114	50,613	48,168	45,525

参考文献

- 一、山梨県中富町誌 昭和四十六年、中富町役場発行
- 二、角川日本地名大辞典 昭和五十九年発行
- 三、農村社会の研究、服部治則 一九八〇年御茶の水書房発行
- 四、現代宗教研究 過疎地域における寺院の現状―山梨県早川町―特集
寺院実態調査報告Ⅰ 昭和五十九年 日蓮宗現代宗教研究所発行
- 五、平成十七年国勢調査速報 山梨県南巨摩郡人口の推移、一覧表